

事務所：(160) 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内

電話=(03) 364-2311 振替=東京1-6599

原稿宛先：(113) 東京都文京区弥生1-1-1

東京大学農学部森林動物学教室 樋口広芳

ご 挨拶

会頭 黒田 長久

私は昭和50年、私的事情で会頭を辞任させていただきましたが、以来古賀会頭の下で副会頭、各幹事の方々が若々しく、かつ新たな学会の運営に努力され、本年6年ぶりに大会に出席して、研究発表のレベルアップと活気に触れ嬉しく思いました。そして、この間に、①「鳥」の改革②双書の復刊③出版物販布④会員増加と会費納入⑤例会、地方大会形式⑥内田基金等の設定⑦役員選挙の方法などが役員、評議員、会員のご協力で検討され、日本鳥学会ニュースに細かく記録されているのを知りました。

ここに、再び会頭の任に復することとなり、古賀前会頭以下役員、会員諸兄のご努力を讃え、御礼申し上げます。また、明1982年は本会創立70周年の行事も企画されており、皆様と共に万全を尽したいと存じますので、よろしくお願い致します。

さて、鳥学は広く深くなり、近年の主流は生態学、行動学や渡りの面にありますが、一方でミクロな生化学、内分泌学なども分野グループの間で発展し、分類学には染色体、蛋白質分析、血清反応が、渡りには筋肉生化学が、生態的な個体群同定にも酵素が、そして保護の面でも雌雄判別(トキの例から)に染色体が用いられています。

これらミクロな面は鳥学の生物学的な“核”となり、それをいく重にも包む玉ねぎの皮になるのがマクロな形態学や生態学といえます。そこで、鳥学は今や国際的な“玉ねぎ型総合生物学”になったわけです。そして、ミクロ分野はマクロ分野に代るものではなく、鳥学の“核”を強化しマクロ分野を発展させる“肥料”であり、“種の認識”はやはりマクロな形態や生態に具現されます。日本鳥学会も70周年を迎え総合鳥学の道に出発したいと思えます。

なお、明年は国際鳥学会議もモスクワで予定されており(その開催に懸念もありますが)、会員の皆様の発奮を期待致します。

昭和57年度大会のお知らせ

昭和57年度大会は、11月21日(日)～22日(月)に、宮城県仙台市を中心に開催されることになりました。なお、大会・研究発表等を終了後、23日(祭日)には伊豆沼での雁や白鳥を観察するエキスカージョンも予定されています。大会の準備・実施にあたっては、本会々員の横田義雄氏(雁を守る会代表)を中心に、宮城県内の会員諸氏、関係者に依頼し、企画・具体化が進行中です。本会創立70周年記念大会もかねております。詳細はいずれ発表になりますが、ふるって御参加下さいませよう、今から来年のスケジュールにお組み込み下さい。

◎ 学会創立70周年記念行事 ◎

日本鳥学会は1912年（明治45年）に創立されて以来“鳥学の発展および鳥類保護への学術的貢献”を目的に活動してきました。昭和57年（1982年）は創立70周年にあたり、下記のような記念行事が企画されています。

- 1 記念出版『現代の鳥類学』：朝倉書店から1983年3月ころ出版の予定。A5、250ページ、約3,500円、現在著者11人により、主として系統分類、進化、生態を中心に進行中。（森岡弘之幹事担当）
- 2 記念講演会：5月12日（水）夜。安田生命ホール（東京・新宿西口駅前）。演者は、青柳昌宏氏（筑波大学付盲学校）、柴田敏隆氏（山階鳥類研究所）、中坪礼治氏（元NHK）の三氏（いずれも本会々員）に依頼・了承済み。詳細については後日連絡します。（竹下信雄幹事担当）
- 3 学術調査：中国、東南アジア、アリューシャン列島等検討中であるが未定。（樋口広芳幹事担当）
- 4 『鳥掲載論文目録（仮称）』5月ころ発行の予定。価格等未定。76年12月発行の第25巻（通巻第100号）までの目録です。（川内博幹事担当）

◎ 第1回鳥類談話会を開催 ◎

北海道も各地に鳥類に関心をもち、研究している人が徐々に増えてきている。以前からこれらの人々が集って交流会をもってはどうかと考えていたが、9月22-23の両日、根室市東梅の風霞荘で第1回の鳥類談話会を行った。参加したのは道東（十勝、釧路、根室、網走東部）の鳥学会会員、日本野鳥の会々員有志14名であった。

今回は第1回目なので、とくにテーマも決めず、情報交換など話し合いを中心とし、23日には風蓮湖の標識ステーションを見学して解散した。今後もこのような会合を年1回くらい持つことを計画しているが、来年は若手研究者の研究紹介なども加えた談話会を開催したいと思っている。

この談話会は、いまのところ組織としてもはっきりした形のあるものではなく、性格、今後の方向も未定である。しかし、このような点については回を重ねるにしたがって、少しずつ明らかにしていけばよいと思っている。（藤巻裕蔵）

◎ 会費改定についてお知らせ ◎

本年度大会（筑波）にて来年度（1982年4月）より、普通会費・入会金を下記のように改定することが決まりました。

	現 行	改 定 後
普通会費	3,000円	→ 4,000円*（購読機関も同じとする）
入 会 金	2,000円	→ 1,000円（ただし、学生に限り免除する）

*すでに82年度以降分を納められている方も差額をお願いします。

今回の改定は前年度大会（帯広）直前の評議員会にもかけられ、長時間討議された上、一応来年度（1982年度）には行なうという申し合せがされていたもので、原案にあたっては、吉井氏を代表とし、川内・宗近・長谷川の各評議員で小委員会を設けて検討し、評議員会で了承され、総会にかけられ決定されたものです。

＜普通会費値上げの理由＞ 前回の改定（1,500円→3,000円、1975年度）からすでに7年間据え置き、その間現執行部はできる限りの努力をしてきました（詳しくは鳥学会ニュース6、7参照）が、このところ通常会計における収支（おもに会費収入と機関誌印刷・郵送費支出）のバランスが、ほぼ同じか、やや赤字を示してきたこと、今後も続くと予想される諸物価の値上がりを考えると、近年中に完全な赤字になること。それに、なるべく早く行ないたい「鳥」の正規発行（年4号予定のところ、現行では2/3号合併で3号しか発行していない）が、現在の予算上では不可能なためです。今回の普通会費値上げにより、約50万の増収が見込まれ、一応特別な理由がない限り当分の間財政的には大丈夫だと思います。

＜入会金値下げの理由＞ 入会金については減額（学生の場合は免除）したのは、現行のままだと入会時が6,000円になり負担が大きくなり、入会者が減るのではないかという心配からで、減額により現行と同じになります。このことは入会金制度自体の意義についても問題が波及しましたが、次のような理由から継続することになりました。まず第一に入会時にかかる事務的作業（入会案内の発送、個人・発送カードの作成、会則・名簿等の発送……しかもそれらを各幹事が分担しているのでその間の正確な連絡）、第二に金銭的に余分な費用がかかること（例えば、鳥を送る場合、普通学術刊行物として一括発送すれば40円ですむのが、新入会時には別途発送のため120～240円かかる。また、名簿補遺の印刷費等）など、幹事や財政上の負担を少なくするため、気軽に入退会されないようにという意味からです。また、学生に限りそれを免除することにしたのは、会員からの要望（例えば生態学会のように学生会員制度を設け、会費を安くしてほしい）があり検討しましたが、学生である証明や卒業年度の把握が難しく、ボランティアの幹事にこれ以上の仕事は物理的にも精神的にも不可能であり、現状でできることは、入会時に学校名・学部・学年・研究室等を明記し、入会を希望してきた場合は相手を信用し、入会金を免除するしか具体策がありませんでした（ちなみに、生態学会は年間数十万円を払い日本学会事務センターに会計等を委託している）。また、以上の減額による収入減はあまり大きくないと考えられます（新入会員は年間40～50名で4～5万円の減、学生・院生・研究生はそのうち10名程度で1万円減といったところと予想している）。

＜通常・特別会計の制度について＞ 通常会計で赤字になっても、特別会計に余裕があるので、当分の間それでまかなえるのではないかという意見もあると思いますので、この制度について説明しておきます。これは鳥学会ニュース6、7にもふれられていますが、山階鳥研から現在の国立科学博物館へ事務所を移した7年前、15万円の繰越しに対し、46万円の「鳥」未出版債があるという破産状態から、今年度のように450万円の繰越しが行なえるようになったのは、ある時期、鳥の発行が年に1回発行されるかされないかという状態でも退会せず、その後、現執行部がその当時の分の会費を請求した際、心よく支払われた約350名の会員の方の意を無にしないよう、二度と破産状態にしないためのものです。鳥の発行その他、年度内で処理すべきものは通常会計（おもに会費とバックナンバー売却収入によるもの）でまかない、非常用および特別企画用として特別会計（おもに、破産時に当時の評議員が拠出した寄付金、故老田・斉藤・内田・黒田各氏のご寄付および黒田氏著書の売却代金によるもの）を設けています。

〈最後に〉 今回の会費改定にあたって長々と説明を書いたのは、まったくの素人が、突然破産状態の会計をまかされ、手さぐり状態で今日まできて、一応財政的に安定してきたこの機会にその経過を公表しておくことは、今後この仕事を継いでくださる方のためになると思ったためです。人によってはお気にされる部分や説明不足と感じられる点もあるかもしれませんが、ご容赦下さい。
(会計幹事 川内 博)

◎ 56年度大会に参加して ◎

— エクスカーションの報告 —

初めて参加した大会は、数々の研究の成果に、発見したり、考えさせられたり、励まされたりする、盛り多いものだった。大会には多数の参加者があり大変賑やかだったが、三日目にまで残る方は数少なく、特に若い世代がひどい減りようで、寂しく残念に思った。しかしながら、エクスカーションは天候に恵まれたうえに、林業試験場の阿部氏、農事試験場の方々、そして浮島湿原への案内を買って出た下さった地元の望月氏の誠意によって、非常に優れたものとなった。ここで改めて感謝したい。

まず私たちがこの日に見学したのは、同じ筑波学園都市内に新設された農事試験場内の近代的な実験・飼育のための鳥害実験棟及び大ケージだ。多くの有意義な研究が展開される可能性を秘めた贅沢な設備には、感嘆の連続だった。まず実験棟には、通常目的の実験室や大小の飼育室に加えて、環境条件を管理できる特別飼育室、防音室、手術室、大ケージの機械操作室他がある。大ケージ内の動きは、ケージ内各所のビデオカメラを機械操作室から遠隔操作すれば、完全に把握できる。大ケージは鉄骨総金網張りで、間口40m・奥行60m・高さ12mもある。内部は植生を目的に応じて形成できる部分と、動く壁によって鳥をケージの一方に追いこむ仕組みを備えた耕作地とに、二分されている。

しかし、このように素晴らしい設備も良いこと尽くしではない。常勤非常勤の研究者及び管理者を合わせても五本の指で足りる程度だし、大ケージを本格的に使用する頃にはもう既に老朽化した金網を張り替える予算はありそうもないし、重宝と見える器機や空調などの作動に必要な経費は予算に組まれていない。なぜ長期的な計画を立てないのかと、国の予算の行方を訝りつつ、この最新の設備をひとつ残らず絵にかいた餅にはしたくないと思った。せめて、こんなこともあんなこともできると、ひとりわくわく空想に耽るのは楽しいことだった。

見学の興奮も覚めやらぬままに、車で一時間余だったか、茨城の街並を過ぎて蓮の葉のゆかしく揺れる水郷へと抜けて行った。途中で、越冬ツバメの営巣場所、鷺山、鳥獣保護教育の実践に力を入れる小学校、茨城県内で野外調査をする際の秘訣——招かれたら遠慮せず大いに飲み食いをする——などを、望月氏が教えて下さった。やがて木立ちより高いものがない広く平らな景色の中に、霞ヶ浦の白い水面が見え隠れし始めたのは、昼近くだった。目指す浮島湿原の浮島という地名は、この地域がその昔湿地であったことを示す。その後長い年月をかけて干拓が進み、私

— 例会発表者募る —

学会ではこれまで、都内の会場（東大農学部、上野動物園ホールなど）で随時例会を開き、会員相互の情報交換等に役立ててきました。この例会は本来会員が自由に発表する場でですので遠慮なく発表を申し出て下さい。一例報告、現在手がけている研究上の問題、保護のアピールや他の研究者への協力依頼、あるいは大会の持ち時間不足に対する不満解消など、大いに利用して下さい。(ハガキに発表題目、予定時間、住所、氏名明記の上事務局まで)

たちが探鳥に夢中になった霞ヶ浦を広く臨むヨシ原のあたりまで、今では御丁寧に舗装道路が、土手に小高く引かれている。この道路は内陸側の水田と水辺に続くヨシ原とを分断しながら、ヨシ原への絶好のアプローチとなっていた。湿原の広さ、開放水面からの距離などを考慮すると、ヨシ原の鳥を調査するのに興味深いフィールドだと思われた。オオヨシキリはもちろん、数は少ないかもしれないが同所的（営巣場所は厳密に言うとはっきり違っている）に繁殖するコヨシキリ（望月氏）に加えて、セッカ、コジュリン、ヒバリ、ヨシガモ、ゴイサギ、オオバン、水草の黄色い花の咲き漂う波間に造巢中のカイツブリ、アマサギ、コサギ、チュウサギ他が見られた。ヨシ原は農民の貴重な財産であるゆえに、開発から免れているにすぎない。東京近郊のこうした優れた湿原を大事にしたい。浮島では、鳥を見るだけでなく、弁当を頼張りながら、様々な方にお会いしお話を伺ったり、御助言を戴いたりする良い機会を得ることができた。実に感謝している。私だけでなく他に参加なさった、より経験を重ねている方々もまた、満足して帰路につかれたことを望んでいる。

（大庭照代）

◎ハンガリーの雁シンポジュームの記◎

IWRBの第27回の年次大会はハンガリーのデブレツェンで、1981年10月26日から7日間の会期で開かれた。日程は、10月26・27日の両日が代表者会議、28日はホルトバギー国立公園の参観、29・30日は雁のシンポジューム、31日と11月1日はキシクンサーク国立公園を参観。

デブレツェンはハンガリーの東部国境のルーマニアに近い静かな明るい町。朝、窓をひらくと黄葉の広場からシラコバトのやさしい啼き声がきこえてくる。シンポジューム会場はホテルアラビカの二階広間で、我々の宿舎と食堂も同ホテル内なので便利で快適である。参加人員は90人25か国に及び、日本からは環境庁の山口鳥獣保護課長、山階芳麿氏代理阿部学氏の両氏が日本代表、他に民間研究者（日本鳥学会代表）として筆者ら三人が出席した。今大会に日本とセネガルが遠方から参加したことはうれしいとマッシュウス氏（英国）が話していた。

26日9時半、ハンガリー政府代表者の開会の辞、IWRB本部の事業報告、以下各国の近況報告と続き、日本のトキの報告もあった。荒崎のツルについては各国の関心が高く日本政府の努力に期待したいようすであった。翌27日の代表者会議はIWRBとICBPの活動がどこまで共同作業できるかで激論が続いた。IWRBのかかえている問題は世界的規模でみると複雑多岐で、あらためて日本人の視野の狭さに反省させられる。最近アフリカの大西洋岸ギニアのビソー海岸で、少なくとも十万を下らない渉禽類の越冬地が見つかったとの報告もあった。

28日はデブレツェン西方のホルトバギー国立公園（保護区面積6万3千haに及ぶ）へ探鳥に出かけた。ハンガリーは西部に千m級の山が少しあるだけで、中央部は盆地で特にドナウとチサの両河川の間は東部平原と呼ばれ、この平原は一部耕地化されているが、中心部はまだ荒蕪の地（ブスタ）である。今日の探鳥は2頭立ての耕作用馬車に乗ってブスタを横断するのである。見渡す限り無限の地平線、空と土だけの広がりには迷いこむという感じだ。1台に10人ぐらい、乾草に腰を下し、合せて8台の馬車が、霧の高原を行くさまは一幅の絵のようである。ダルヴァス湖に着く頃は忽ち晴れて暖かい日射し。湿地では馬の足が腹までのめり込んで立ち往生もした。ここホルトバギーはマガン約4万羽、ハイイログアン2千羽の越冬地、カリガネは約2千羽秋に中継地として下りる。多数のカモ類、オオハクチョウ、コハクチョウも渡る鳥の天国。この広い所で水鳥羽数カウントを僅かに2人で担当し、いつも雁の下りる水面を分担して同時カウントをするそうで、飛翔中の群の羽数はカウントしないという。約3時間を過ぎる馬車行の後、赤い夕空を飛ぶツルとガンの群を眺め、暗くなってホルトバギー・チャルダの施設内で夕食会。ブドウ酒

バラック酒（アプリコットブランディ）がふんだんに用意され民族音楽と舞踊の接待を受け、酒興に乗って一同じゅうずつなぎの長蛇の列になってねり歩く大はしゅぎ、夜9時すぎバスで宿舎に戻る。

29・30日は雁のシンポジウム。マシュー氏、スマート氏、オジルビー氏、オーエン氏（以上英国）、ルチケ氏（東独）、ボイド氏（カナダ）、ステルベツツ氏（ハンガリー）をはじめ若手の雁学者が一堂に集ったのは壮観で、我々はIWRB雁研究班を構成する各亜種セクションの責任者に会うこともできた。来年5月にカナダ・エドモントンで水禽の繁殖地に関する第28回シンポジウムが開かれる関係で、今年のハンガリー大会は、雁個体群の最近の変化とその原因を討議するのが主眼となっており、ハイロガン、カリガネ、アオガンの3種に力点をおく。前種は最近欧州では羽数がふえ、後の2種は減少しつつある。集った演題は41で、29日午前・午後、30日午前の3つの時間帯に行なわれた。1題には10分のスピーチと10分の討論時間が割り当てられている。討論は多いが時間が来るときちんと切り上げ、討論が無ければどんどん進行する。

演題名を皆記したいが、紙幅の関係上不可能なので我々の興味をひいたものをあげると、

- ・ カリガネのスカンジナビヤ山岳地帯への再導入の試み（エッセン氏・スウェーデン）
- ・ ハンガリーのカリガネとアオガンの渡り（ステルベツツ氏・ハンガリー）
- ・ ソ連のアオガン（ビノクロフ氏・ソ連）
- ・ コクガンについて（サン・ジョセフ氏・イギリス）
- ・ 極地営巣雁の気温の影響（ボイド氏・カナダ）
- ・ 西ヨーロッパに営巣する極地繁殖雁の春の中継地点の重要性（エビンゲ氏他）
- ・ オランダの雁と人間の最近の関係（レブレット氏・オランダ）

私たちは「日本の雁の現況」の小論文を提出したが、これはハンガリーの鳥学誌「アキラ」の本大会特集号に掲載されるとのことである。横田は30日、日本の雁の減少についてスピーチを許されたが、20分近くかかり、時間切れで質問も無く終わった。論議が多かったのは、雁と人間の関係で、採餌地の確保、狩猟との関連、鳥害への補償（補償を行なっている国も少なくない）などの点で、国ごとに事情が異なるので、その国独自の対応が必要と思われた。演題の国別を参考までに記すと、英国7、オランダ5、ハンガリー4、東独4、西独4、ポーランド3、スウェーデン、デンマーク、ユーゴ各2、スペイン、ノルウェー、カナダ、ソ連、ブルガリヤ、インド、フィンランド、アメリカ、日本各1となる。ソ連と米国を除くと、雁の飛来数の多い国が雁研究者も演題も多いようだ。ドイツが東西合せて8題も出しているには敬服する。

30日午後は代表者会議の緊急会議にあてられ、私たちは「雁のバンディング打合せ会」に出た。白鳥バンディングの大家スレイドン教授（米国）も出席。ソ連のビノクロフ氏から同国のバンディング実施準備状況を聞くことができたのは収穫だった。ただ各国に微妙な差があるらしく、具体的に首輪の形状、色彩の統一をするまでには至らなかった。

10月31日、デバ・バーニヤ風致地区のノガン（*Otis tarda*）ステーションを参観。ノガンは絶滅に傾しているが、ハンガリー平原にはまだ3千羽近くおり種の貯蔵所として重要視されている。ステーションでは人工繁殖と野生化を実施しており、昨年秋から本年春にかけて62羽の人工繁殖鳥が放鳥された。飼育中のもの、野生のもの（約500羽ぐらいが付近にいる）を見学。ノガンの飛ぶのも初めて見た。次に例年雁の大群を見るザバドキ・ジョス地区に行ったが、当日は小教で、夕方訪れたカルドスクート地区にはクロヅル（*Grus grus*）の数百羽が耕地に下りているのを発見。一同バスから下り待期しているうちに、約6,000羽（ハンガリーの説明者によ

る)のクロヅルの大群が東北方から飛来し南方の数キロ離れた地区に下りた。夕闇にまぎれ黒い帯がゆれ動くように見え雁と区別し難いが、鳴りひびく啼き声は正にツルで、下りた場所には沼と湿地があるそうで、昼は耕地のトウモロコシの落ちこぼれを餌としているという。ケチュケメットのホテルアラニホモクに泊る。

11月1日、早朝散歩するとシラコバトが多く、平和で質素で自動車が多くない、とても感じのよい農村型の町であった。キスタンサーグ風致地区の塩湖を見る。アルカリ土質の白い地肌もあらわに折からの乾期に一滴の水も無かったが、ドジョウツナギ、ヨモギその他海岸性の植物があり、雨期には海浜で見られる涉禽類その他の水禽の大群が集まるという。ブタベストに向かう途中で、又耕地の中の野生ノガン群を見た。午後4時ブタベスト着、ここで一同別れを惜しんで解散した。本大会に於けるハンガリー当事者の手厚い接待には心からの感謝の意を表したい。

なお、気のついたことを二、三記すと、会議・演説が3、4時間続くと同間に15～30分のコーヒーブレイクが入り、参会者はコーヒー片手に立ちながら各国間の情報交換を行なう。これは有益である。会議中には事務局の秘書嬢が論文のコピー、図表、日程変更等を頻りに配布する。席を外しているともらいそこね不便を感じるのでフル出席を要する。会場の続きの2階や3階の部屋で、映画や展示、臨時の小集會が行なわれるのに、その部屋を指示する貼り紙などは一切無い。廊下をまわりながら、部屋のドアを一つ一つ開いて探し廻った。受け付けや相談等の雑務係も見当らず、それでいて整然と会議全体が進行するのだから立派なもので、主催者や議長の手腕によるものと思われた。映写機はスライド用1台とオーバーヘッドプロジェクター1台で、スライドはほとんど皆白黒であった。用語は英語を主とし、仏、独、露語どれでもよく通訳者もいた。但し日本語通訳者はいない。ユーゴ人演説者で、そばの英語通訳者に原稿を朗読してもらう人もいたし、質疑応答に出たソ連のビノクラフ氏が英語につまり通訳者が急いでかけつけたこともあった。横田などは英語を聞いてもろくに判らないが、演者の原著や抄録が事前に配布されることが多いから目を通しておけば、少しは役に立つ。外国語がうまいに越した事はないが、下手だからといって学会出席を敬遠する必要はなく、発表したい論文を書いて外国の学会に多数出席することが日本鳥学会の発展につながると思う。IWRBの雁部会は世界各地の雁の情報提供を強く望んでいる。思うに世界の雁という立場から見ると、北東アジアは一つの盲点である。朝鮮、中国、ソ連領の沿海州、樺太、カムチャッカの雁は、日本が発起して外国学者との共同調査を実施し盲点を埋めるべきで、日ソ、日中の渡り鳥条約もあるのだから日本政府は積極的に実施に乗り出してもらいたい。私はスピーチの最後にそのことにふれておいた。

呉地・大津はたちまち30～40人の各国の学者と知り合いになり情報を交換し、帰りには英国のスリムブリッジで指導を受けて来た。なお、スレイドン氏の話では、ソ連のキンンスキー氏(シベリヤの水禽の最近の分布を調査された学者)が昨年9月14日に肝癌で死去されたそうである。氏からはヒンクイの分類のことで手紙で示教をいただいたことがある。ここに謹んで哀悼の意を表する。

(横田義雄・呉地正行・大津真理子)

付記：本報文については会場で配布された印刷物を参考に呉地・大津とも打ち合せ誤り少くするようにした。横田

◎ 会員名簿追加

昭和56年4月発行の会員名簿に下記の名譽会員を追加して下さい。名簿作成時に住所不明のため掲載できなかったが、その後明らかになったものです。

岡田喜一(名譽会員) 852 長崎県長崎市金堀町130

なお、会員住所の変更等の生じた場合には至急学会事務局宛御連絡下さい。

◎学会誌「鳥」の発刊と原稿募集

「鳥」Vol. 30 2/3号は昭和57年2月上旬の予定です。引き続き4号の編集発刊を3~4月頃に行いたいのので、会員各位の研究成果を投稿して下さい。「鳥」は年3~4回発刊される学会の最も重要な研究誌です。研究論文はもちろんのこと、短報などの投稿も募集しています。

◎ 日本生命財団の助成金 ◎

9月末、財団法人日本生命財団(有沢広己会長)は、昭和56年度の「開発と自然環境の保護・管理・改善の調和に関する研究」に対する助成対象を発表した。187件総額7億6,615万円の申請の中から、23件総額7,061万円の研究が選考されている。

助成対象の研究は広範にわたっており、数例をあげると、鈴木静夫東京理科大学教授「河川底質の変異原性および酵素毒の強度の調査とその評価システムの開発」266(助成金額、単位万円)、坂根隆治伊丹市立博物館学芸員「環境変化に伴う鳥相の歴史の変遷過程」110、伊藤嘉昭名古屋大助教授「害虫の生物的防除に関する基礎的研究」285、宇都宮妙子広島大研究生「南西諸島の固有両生類の分布・繁殖状態および保護に関する調査研究」122などがある。

この助成金のほかに、朝日学術奨励金、沖縄研究奨励賞について本学会に連絡があるが、今のところ学会としては特に反応していない。これらのほかにも、研究助成を行なっている財団等がいくつかある。『日本生態学会誌31巻2号228頁』にも紹介されているので、関心のある方は一読されるとよい。(竹下信雄)

◎ 新刊外国図書紹介 ◎

最近、外国から学会あてに送られてきた出版案内から3点をご紹介します。(いずれも現物を手にしていないので、推せんではなく単なる紹介です)

The Birds of Cameroon, An annotated check-list. M. Louette 著. 1981. Turnhout (Belgium), Brepoles. Pp. 296, 66 maps. 定価 BF 900. ISBN 90 65 69 65 63. アフリカ中西部の国カメルーンの鳥のチェックリスト。従来の記録に加えて著者の観察と標本により852種をリストアップ。英文ではなく仏文の可能性あり。

Birds of Prey of the World. F. Weick 著. 1980. New York, Paul Parey. Pp. 159. 1140 color illustration (40 plates), and 160 line drawings. \$ 48. L.H. Brown の協力を得て成ったワシタカ目の鳥のカラーガイド。

Proceedings of Symposium on Estimating Numbers of Terrestrial Birds, Studies in Avian Biology 6. C. J. Ralph, J. M. Scott 編. 1981. Lawrence (Kansas), Allen Press. Pp. 630. \$ 20. 昨年の10月26-31日カリフォルニア州で開かれたシンポジウムの論文集。(竹下信雄)

<あとがき> ▼1年ぶりに鳥学ニュースをお届けいたします。『鳥』誌とは違った分野をカバーするための「ニュース」です。会員相互の情報交換や鳥学論議の場として、ご利用ください。投稿を歓迎します。▼森岡弘之幹事はネパールへ調査旅行、唐沢孝一幹事はオーストラリアとニュージーランドへ研修旅行。いずれ、楽しいおみやげ話を聞きたいものです。▼「学会に参加して」の大庭さんは現在ロンドン大学Ph.D課程在学中。10月初めに離日し、来年のクリスマスまでは戻らない予定とか。ロンドンから、レポート用紙にケイを引いた原稿を、送って下さいました。▼ハンガリーのシンポジウムから帰った横田さんら3人から、早速原稿をいただきました。ハンガリーはとてもよい所で、「何年か住んでみたい」とは一行のひとり、大津真理子さんの感想でした。(竹下信雄記)